

はじめに

先行きが見通しにくい時代です。何とか現状を改善しようと、さまざまな分野で変革の方向を探る努力が見られつつあります。そのような中、議論という言葉をあちこちで耳にするようになりました。新しい物事を始めるには、今までどおりではうまくいかない、ではどんな方向に進んだらよいのか、といった議論を重ね、できるだけ多くの人の同意を得ながら方針を決めて進む必要があるからでしょう。

しかし議論を用いるその目的はよいのですが、日本では、どうも議論というものの本質が、はっきりしていないように思います。「議論が尽くされていない」「もっと丁寧な議論を」などという批判はよく聞きますが、ではどんな議論であつたらよいのでしょうか。

本書は、その議論の正しい方法を説明するものです。議論の正しい方法を身につければ、不安や不満足な状況に、冷静に新しい方法で対処することができます。また、皆さんが素敵な新しいアイデアを思いついたとき、それを理性的に実行可能などころまで磨き、納得してくれる人を増やしてくれるでしょう。

それはなぜでしょうか。本書で扱う、英語で argument に相当する議論とは、相手がまだ受け入れていない主張を発する際に、その主張を明確にし、その主張を支える「根拠・理由づけ」を考えていく方法だからです。言うまでもありませんが主張することの内容は各自の自由です。ですから、本書の焦点は、どんな根拠であれば信頼してもよいのかということにあてます。本書を読めば、この方法を、段階を追って理解し、より多くの人が納得できる主張にしていけるようになります。そして、真実により迫ることができるようになります。自他の主張を正誤をよく考えずにうのみにすることがないようにする有意義な方法なのです。

議論とは、実は皆さんの身近なところでよく見かけるものです。大学生の皆さんであれば、例えば就職活動のための志望書や面接を思い浮かべてみてください。主張を先に述べて、それにふさわしい根拠を具体的に、などとありますね。これが、実は議論の方法なのです。この方法に則って書かれる文書は、一般に「論文」と呼ばれています。入試で経験されたかもしれない「小論文」もその一種ですね。社会人の皆さんであれば、商品企画などを通す際に、何を提案しているのか（主張）、その理由は何か（根拠）、という準備を求められることでしょう。これも、主張と、正しくそれを支える根拠をそろえる議論のスタイルです。

議論の方法はさらに、実は「科学」あるいは「学術」と言われる活動の根底にある方法でもあります。「科学的」という言葉もよく耳にしますが、その具体的な定義についてははっきりと説明することはできるのでしょうか。科学とは、それこそ、観察によって誰にでも信頼できる（つまりほかの人が正しさを確かめることのできる、検証可能な）データを十分に集め、それを根拠にして新しい主張を行う作業です。こう考えてみれば議論の方法と科学は基盤が共通だということが納得いただけるでしょう。本書は、文系・理系を問わず論議が共通の「科学」「学術」の方法でもあることを心がけて執筆しました。

実は、この議論の方法を教えるのが、大学（高等教育機関）の役割だというのが私の考えです。学生の多様化や18歳人口の減少、あるいは公的資金減少という状況にあたって、昨今、大学はそもそも何をするとところなのか、ということが大きな議論になっています。問われて改めて明確にしてみると、大学の重要な役割の1つは、「科学」「学術」を教育し、実践することだと考えられます。であれば、本書のような議論の方法を教育することは必須と思われるわけですが、今までは研究室やゼミなどで口伝的^{くでん}に教えられてきたのかもしれない、あいにく日本語でそのような内容をずばり説明したような書籍には、いまだ出会ったことがありません。そこで議論の方法をわかりやすく説明したいと考えて執筆を決めました。

読者は、主に大学生やビジネスパーソンを念頭に置っていますが、正しい議論を見極めたい、また組み立てたいという興味を持たれた中高校生や一般

の方々にも読んでいただけたら幸いです。「0 正しい議論とは何か」でふれますが、議論という枠組み、つまり主張を考え、その理由を挙げる練習を、例えばアメリカやイギリスでは中高生がそれより前から始めます。昨今、英語学習を早期から始める必要も盛んに言われています。しかし、言語は思考法と表裏一体ですから、文字や単語や文法だけでなく、国際コミュニケーションのために英語を学ぶというなら、こうした思考枠組みのトレーニングも早くから同時に訓練した方がよいように思います。母国語と外国語とは、それぞれ文字・語・文法・思考法が組み合わさった「枠組み」ですので、芯となる自分の考え方は育てながら、必要に応じて枠組みは切り替えられるように練習していけばよいのではないのでしょうか。

さて、議論の方法を学んでいただく前に、2つ注意があります。1つは本書は、新しいアイディアを思いついたあとに、その主張を補強するための方法を説明するものです。ですから、この方法を使う動機づけの中心であるべき「新しいアイディアを思いつくこと」つまり創造性そのものについては、末尾に少しまとめたにとどめております。創造性についてはすでにたくさん出ている、別の書物で学んでくださるよう、お願いします。

2つめは、議論というとディベートを思い起こされるかもしれませんが必ずしもそれらは同一ではないということです。ディベートという語の原義は確かに「何かについて異なる見解を表明するディスカッション」ということで、またそこで要求されるのが根拠と論理であることも同じなのですが、日本ではどうもそれにより勝負を決めるという部分が注目されすぎている印象があるのです。この意味では、本書はどんな根拠や論理があれば正しいのかに焦点を絞った内容で、ディベートにも利用できるかもしれませんが、そのための本ではありません。

それでは、本書が、皆さんのよりよい人生に役立つことを祈りつつ。

目次

はじめに i

0 正しい議論とは何か 1

- 0.1 正しい議論とは「理性的意見交換」のこと 1
- 0.2 正しい議論を学ぶ理由 1——文化的側面 4
- 0.3 正しい議論を学ぶ理由 2——心理的側面 13
- 0.4 英語と日本語の違い——本書における用語の定義 15

———— I 部 正しくない議論とは ————

1 正しくない議論の7つの例 19

- 1.1 理性的な意見交換にふさわしくないのは 19
- 1.2 よく見られる「正しくない議論」 19
 - ◆ 1 「みんながしているから」正しい——衆人に訴える論証 19
 - ◆ 2 人物を非難する——人物非難 22
 - ◆ 3 もとの発言内容を曲解して用いる——わら人形論法 26
 - ◆ 4 ふさわしくない内容を導入し注意をそらす
——燠製ニシン論法 28
 - ◆ 5 情に訴える——同情論証 29
 - ◆ 6 過剰な表現を使う——過剰表現 30
 - ◆ 7 脅迫によって正しいと認めさせる——威力に訴える論証 32
- 1.3 建設的な議論のために注意すべきこと 34

 II部 正しい議論の構成要素

- 2 前提根拠と主張を明確にする** 43
- 2.1 主張と前提根拠を見極める 43
 - 2.2 前提根拠と主張がすぐには明確ではない場合 47
 - 2.3 自分の主張を伝えるために 49
 - 2.4 前提根拠は信頼に足るか？ 51
 - 2.5 関連した誤りのパターン 54
- 3 前提根拠に用いる情報は確かか** 61
- 3.1 他人の言を無批判には信頼しない 61
 - 3.2 情報源を明らかにする 62
 - 3.3 適格な情報源を探す 63
 - 3.4 情報源は複数調べて内容を比較しよう 67
 - 3.5 インターネットの情報は注意して使おう 68
- 4 語の定義は一貫しているか** 71
- 4.1 議論の前に、使用する語を定義する 71
 - 4.2 語の定義がはっきりしない場合は、より限定する 72
 - 4.3 語の定義そのものについて議論があるとき 74
 - 4.4 定義はあくまで定義 75
 - 4.5 関連した誤りのパターン 75

 III部 正しい議論の流れ

- 5 「原因と結果」を考える** 81
- 5.1 因果関係と相関関係 81

- 5.2 相関関係には、多様な説明がつく可能性がある 83
- 5.3 最も適切そうな説明を探す 87
- 5.4 複雑さを覚悟する 89
- 5.5 関連した誤りのパターン 91

6 一般化と統計の見方 93

- 6.1 「一般化」について 93
- 6.2 複数の例を使うこと 94
- 6.3 代表的な例を探そう 96
- 6.4 背景に全体で何件ある中の何例？ 99
- 6.5 統計の結果を見るときは注意深く！ 101
- 6.6 反例を考えてみよう 112
- 6.7 関連した誤りのパターン 113

7 たとえ（比喩）を正しく使う 115

- 7.1 主張内容に対して、たとえの同じ点と違う点を探そう 115
- 7.2 たとえによる議論は「関連がある似た例」が必要 116

8 その他の論理学用語とその考え方 119

- 8.1 演繹的な議論 119
- 8.2 帰納的な議論 119
- 8.3 三段論法 120
- 8.4 前件肯定と後件否定 122
- 8.5 背理法 123

9	議論の思考が必要な文章の型	127
9.1	物事がどのようなものであるかを説明する型 (Report : 報告文)	127
9.2	物事がなぜ、どのように起こるのかを説明する型 (Explanation : 説明文)	128
9.3	説得のための型 (Persuasion : 説得文)	128
9.4	根拠に基づく意見交換のための型 (Discussion : 討議文)	130
10	本質と装飾を区別する	133
10.1	具体的かつ簡潔に	133
10.2	事実に基づいて、強すぎない表現で	134
10.3	一貫した語を用いよう	134
11	謙虚に受け手の反応を活かす	137
11.1	議論における「謙虚」の意味	137
11.2	謙虚の2つの意味	137
12	学術論文を書く	141
12.1	論文の構成	141
12.2	正しい議論と博士号	143
	〈正しい議論のための5つのステップ〉	145

13 新しい考えを思いつく 149

- 13.1 創造性を高める方法論の可能性 149
- 13.2 考えついたアイデアを研究活動に展開するときの注意 155

参考文献 161

あとがき 162

コラム

- 1 利益相反 26
- 2 帰納法と演繹法 39
- 3 数式の有用性 84
- 4 交絡因子と中間因子 86
- 5 ケーススタディ 94
- 6 数値化できることだけを注目していてよいのか 102
- 7 査読付き論文 139

0 正しい議論とは何か

まず、議論の方法とは何か、なぜそれを学ぶ必要があるのか、ということ、文化や教育内容の違いや、人間の認識システムにさかのぼって考えてみましょう。

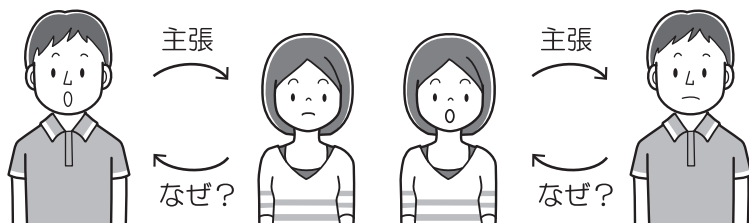
0.1 正しい議論とは「理性的意見交換」のこと

◆「主張」と「なぜ？」のサイクルを意識しよう ◆

皆さんは、自分の知らなかったことや、今まで受け入れていなかった考えを、どのような理由があれば、納得してもいい、従ってもいい、と考えるでしょうか。

とりわけ、自分の負担が増えるような新しい方法が提案されたとき（例えば、試験が増えることになった、授業料が増えることになった、アルバイト代が減額された、など）、それに賛同するかどうか、どんなふうに考えるでしょうか。逆に、何かの目的で、関係する人の負担が増えるような新しい方法を提案せざるを得ないとき、どのように説得しようとするでしょうか。

本書で説明する「議論」は、こういう状況で、他者に何かその人が受け入れていないことを説得するのに役立つ方法です。「新しいことを主張」したときに、「なぜ？」と聞かれる、「新しいことを主張」されたときに、「なぜ？」と聞く、という共通のサイクルがあります。議論の方法とは、そこで



納得をもたらす「根拠」を考えるために蓄積された、知恵や方法論の集積なのです。

これを実践しようと思うと、その準備の過程で、自らさらに新しいことを学べるでしょう。自分の「主張」に対して「なぜ？」を考え、根拠を集めていくことによって、実は自分でも知らなかったことに気づかされることはよくあるのです。

本書の主題である「議論」という日本語には、「けんか腰」とか「口角泡を飛ばす」とか、どうも、とんがった、あまりよくないイメージがついているようです。しかし、これから説明するように、「正しい議論」というものは実は、新しいアイディアの正しさをめぐる、「理性的な意見交換」とも言い換えられるもので、新しいことをどう建設的にとりいれていくかについての大変有意義な方法なのです。

とはいえ、「議論」は西欧の文化に由来する知恵の集積であって、日本を含む東洋の文化に根ざしたものではありませんから、誤解があってもしかたないかもしれません。日本でこうした方法論が伝わってきたのは、主に江戸後期（蘭学の導入あたり）からの約150年でしょう。朝鮮・中国の影響を主に受けてきた日本の数千年の歴史の中では比較的新しい方法論です。文化的背景の異なる西欧的な方法論と日本の既存文化とが、試行錯誤を経て混ざっていくあいだに、何かと誤解も生じてきたのでしょう。

◆「なぜ？」に答えるためには、皆が信頼できる根拠が必要 ◆

さて、ではこの「議論の方法」を初めに簡単にまとめてみましょう。

議論の方法とは、まだ一般に受け入れられていない主張内容が、信頼できる前提根拠によって論理的に支えられていることである。

「なぜ？」に対する答えのことを、一般には、理由とか、根拠とか、前提とか呼び、英語では premise と言うのですが、本書では最重要語でもあり、またそれらの意味をすべて併せ持つ用法として用いるので、あえて皆さんの注意を呼び起こすためにも前提根拠と命名することにします（本章0.4節の「英語と日本語の違い——本書における用語の定義」も参照してください）。

では早速、正しい議論を考えるために、深刻度の強くなりがちなお金のからんだ例で考えてみましょう。

授業料を来年から2倍に値上げします。

どうでしょうか。これだと、「主張」だけで、「前提根拠」が存在していませんね。その場合、どんな反応ができるでしょうか。前提根拠が見当たらないので、「賛成」か「絶対反対」のような反応しか、できないのではないのでしょうか。そう言えば、しばらく前までの日本では、「絶対反対」という旗印をよく見かけました。でもそれだとケンカにしかありませんね。何か理性的な反論や意見交換の余地はないのでしょうか。

やはりまずは、「なぜ値上げが必要なのか？」という質問になるでしょう。では、「主張＝授業料を値上げする」に対して、「なぜ」の説明つまり前提根拠は、どんなものを用意したら、説得されるでしょうか。例えば、大学から「とにかく足りなくてこちらも困っているんですよ、協力してください」と感情に訴えられたとしたら、どうでしょうか。また、「みんなもう納得していますよ、なんであなたは納得しないんですか」であつたら。あるいは、「従わないと退学だ」と脅して強制されたらどうでしょうか。これらは信頼できる前提根拠と言えるでしょうか。

ここでは学費の例を挙げましたが、例えば就職した会社で企画案を思いつき、それが実現すればとても売り上げが増えるはず、と思っているけれども、上司には理解されていないのでゴーサインが出ない、というようなケースもあるでしょう。上司を説得するにはどうしたらよいのでしょうか。泣き落とし？ 脅し？ それらの手法は建設的でしょうか？

このような場合は、なぜその主張を思いついたか、主張を支えるために信頼できる前提根拠を伴って説明されたらどうでしょう。

複数の人がそれぞれ違った見解（「主張」）を持っている場合、それを建設的に話し合うためには、「共通の基盤」が必要になります。それが「前提根拠」です。だから、「前提根拠」は皆が信頼できる内容である必要があります。このためには、前提根拠の内容は、他人が検証しようと思ったときに検証できるようにすること（検証可能であること）が必要です。

これは実は科学の基本でもあるのです。科学は、端的に言うとも新しい考えを、検証可能なデータを用いて正しい論理で支えるという活動です。これに基づいていけば「科学的」と呼んでよいというのが私の考えです。この考えは国際的な場で表明してきましたが、これまで目立った反論はないので、ある程度の妥当性はあるでしょう。

◆ 正しく主張するために ◆

では前提根拠が信頼できれば、それで十分でしょうか。前提根拠と主張がまったく対応していなかったとしていたら、話になりませんね。では主張は、どのような前提根拠に支えられていたら、納得できるものになっていくでしょうか。そのためには、前提根拠から主張に至る過程も、主張をする本人だけでなく他人から見て信頼に足りる必要があります。このために論理的である必要が出てくるわけです。

この観点から、授業料の例なら、税金が減って国庫から学校への補助が減ってしまった、だがよりよい教員を雇用しておくためには人件費は減らせない、施設もあまり老朽化させられない、座学だけでなく実践的な教育の場となる研究活動も続ける必要があるが収入源は国庫からの補助と授業料収入しか主にはない、といった前提根拠がついて、だから「主張」として、授業料を値上げせざるを得ない、ということであれば、どうでしょうか。

適切な方法論に基づいた議論は、新しいアイデアによって、多くの納得を得て世の中を動かしていくにあたって、大変強力な手法です。しかし、日本ではまだこの方法論が整理された形では伝えられていない印象を私は持っています。

それをこの本で学んでいきましょう。

0.2 正しい議論を学ぶ理由 1——文化的側面

それにしても、前提根拠とか、論理的とか、なぜ、わざわざそんな「面倒」なことを言うのか、まだ納得のいかない方もいるかもしれません。その説明として、ここでは2つの可能性を説明してみます。1つ目は生育時の文

化的側面について、2つ目は心理学的な側面から人間そのもののつくりについて、です。ただし、これらは「正しい議論の方法」そのものの内容ではありませんので、興味がなければ読み飛ばして、本章0.4節に進んでいただいても結構です。

まず、なぜ文化の違いによって、つまりなぜ日本で（だけでなく実は広くアジア文化圏で）「議論の方法」が習得されていない状況なのか、その背景を少し考えてみましょう。

◆ 日本における誤解 ◆

日本では、「感情」と「理性」の区分、あるいは「集団」と「個人」の区分が、議論の生じた西欧的文化に比べて、曖昧な印象があります。日本で議論と言うと、屈屈っぽいとか、冷淡などのような、ネガティブな意味につながりがちである印象ですし、議論しているはずの場で、よく感情的なやりとりや、あるいは議論の内容でなくその当事者の人格に関する発言を聞くこともあります。

これは、単なる文化的背景の違いに理由があるのではないかと私は考えています。何か困った事態に出くわしたとき、千年以上にわたって儒教文化圏の影響を受けてきた日本では個よりも集団を優先して行動するのに対し、西洋では個が重んじられるところがあります。つまり東洋と西洋とでは大事にするべきとされていることの優先順位が習慣として異なっているのです。

しかし、どんどん異文化間の交流が盛んになり、また飛行機やインターネットが一般に広まることでグローバル化が進むなど状況が変化し、それらの異なる文化をどれほどのバランスで混ぜ合わせて対処するのがよいのか、そのバランスの調整が改めて必要になってきたのではないかと私は考えています。

この東西文化の違いについて、もう少し掘り下げてみます。

◆ 西洋と東洋の文化的背景 ◆

議論というものが生まれた西洋文化の背景と、日本の文化の背景の違いは、どのように説明できるでしょうか。感覚として納得できても、それを言葉で

説明するのは難しいものです。それが大変よく表現されていると感じたのは、アメリカの心理学者であるリチャード・E・ニスベット博士の『木を見る西洋人 森を見る東洋人——思考の違いはいかにして生まれるか (The Geography of Thought: How Asians and Westerners Think Differently...and Why)』(ダイヤモンド社、2004) という本を読んだときでした。この本はニスベット博士が、アジアからの留学生との交流の中で気づきを得て、各種の心理学的実験の結果をもとに書かれたとあります。

かいつまんで内容をお伝えします (図表1)。

まず、日本を含む儒教を背景とする文化圏では、自己は「全体」の一部であるべきで、調和や同一性を重視してきました (みんなと同じにしましょう。そうすれば平和が保たれます)。この結果、文脈や背景を重視した「包括的」な考え方が好まれる一方で、個々の違いを基盤とした「議論」や「要素分解的解析」は「下等」のものと考えられてきた傾向があるといえます。そのため、何か事件があると、原因はその個人だけでなく背景にもあるという思考になり、またその解決は、敵意を減らすこと (和解) を中心に行われてきました。さらに、生物地理学者のジャレッド・ダイヤモンドの『昨日までの世界——文明の源流と人類の未来 (The World until Yesterday: What Can We Learn from Traditional Societies?)』(日本経済新聞出版社、2013) によれば、こうした和解に重きを置いた解決というのは歴史的には東アジアだけでなく世界各地で見られるものであり、資源の限られた環境においては特に敵意を減らす

図表 1 議論の東西比較

東洋的 (特に日中韓)	西洋的 (特に英米)
■ 自己は全体の一部：調和を重視 (同一性の重視) ■ → 議論は「下等」 ■ → 要素分解的解析は「下等」・包括的思考 ■ 文脈性 高 ・ 事件 → 原因は個人と集団の関係性の中で見出す ■ 敵意を減らす	■ 自己は全体から独立：相互独立的 (個別性の重視) ■ → 議論の「文化」 ■ → 要素分解的思考・包括的な分析はしない傾向 ■ 文脈性 低 ・ 事件 → 原因は個人の資質に帰着させる ■ 勝負をつける

注：Nisbett, 2004 より筆者まとめ。

ことが重要な要素として人類共通に尊重されてきたようです。

一方で、古代ギリシア文明を基盤とする西欧的な文化圏では、自己は全体から独立したもので、相互独立的、個別性の重視がなされてきました。その結果、「議論」の文化つまり要素分解的思考が発展し、他方で、包括的あるいは文脈を考えたような分析はされにくい傾向があります。事件が起きた場合、原因は個人の資質のみに帰着させがちとなり、解決は、和解ではなくて「勝負をつける」方法になる、というものです。

こうした差異の実例として私の印象に残ったのは、アメリカのある大学で東アジアからの留学生が銃を乱射した事件の報道内容です。アメリカでは「その個人がいかに異常であったか」という内容が主であったのに対して、留学生の出身国では「その個人がどのように環境に適応し損ねていたのか」という内容が主であったというのです。日本に住んでいる者としてもこのパターンは心当たりのある話です。

というわけで、日本において「議論」の方法を学ぶということは、幼小時から形成された東洋的な考え方の基盤の上に、西欧的な考え方をあとから足し合わせることになるのかもしれませんが。あるいはどうしても水と油のように混ざりがよくなければ、時と場合によって切り替えればよいのかもしれませんが。足し合わせるのか、切り替えるのかは、これから各自、試行錯誤していきましょう。

◆ 初等教育の違いは、思考パターンに影響する ◆

では、実際どのようにこうした東洋的な考え方が形成されるのでしょうか。ここで重要な意味を持つ可能性があるのが、初等教育の内容です。振り返ってみますと、大人になってから思い出されるのは主に10歳頃以降のことではないでしょうか。するとその前から始まっている初等教育での方向づけは、我々の社会への向き合い方あるいは思考の枠組みというものを無意識的に規定している可能性があります。

このあたりのことがよく説明されていると思われた言説をご紹介します。教育学者の渡邊雅子博士による「日米仏の思考表現スタイルを比較する——3か国の言語教育を読み解く」（『BERD』2006, No.6、ベネッセ教育総合研究所

http://berd.benesse.jp/berd/center/open/berd/backnumber/2006_06/feawatanabe_01.html、2015年5月閲覧）という記事と、その詳細な内容を記した論文である「日・米・仏の国語教育を読み解く——「読み書き」の歴史社会的考察」（『日本研究』35、573-619頁、角川書店、2007）で、これらの中では初等教育における作文の教育法の違いが思考様式の違いにつながるという内容が説明されています。

それによれば、まず日本では、状況や情景から主人公や登場人物の「気持ち」を読み取り、登場人物へ共感することによって物語を理解するという、「共感」に基づいた教育法が行われています。対象が人でなく自然であっても、それを擬人化してまで「共感」を実現しようとします。それに関連して、作文教育では大正時代以降、「思ったままを素直に綴ること」による作文教育が行われてきました。その素材は、運動会などの共通体験をもとに書かせるものが多く、その際に「自由に」「感じたままの気持ちを」書くようにという指導があります。この原因として「集団の中でこそ生かされる個性」という個性の捉え方があるのではないかと紹介されています。共通の体験をどう受けとめたか、その感情表現の違いで個性を発揮するというわけです。けれども、さまざまな文章の規範や書く技術を教えられないことはないので、表現するためのスタイルには、選択肢が存在しない状況となり、結果として作文としての多様性は生まれにくくなると考察されています。共通体験の思い出は起きた順番に書くとききやすいからか、日本の作文の多くは時系列的になるのではないかというのです。

渡邊氏は「型を教えられないことなく「自由に」と言っても、何から自由になるべきなのかがわからない。古くからあるものに照らし合わせてこそ何が新しいのかがわかり、私たちの活動を阻害するものがあって初めて何を克服すべきかがわかる。拘束する枠組みがなければ、そもそも自由はないのである」と述べています。同感です。

型の教育という意味では、近年は大学入試などに小論文という形式が出てきたので、この形式を入試対策的に高校で教育しようという動きも出始めてはいるようですが、こうしたとりくみも小論文という形式の根本にあるべき、「議論の方法」をふまえたものにはなっていないようです。実際に、大学で

科学研究を指導していると、日本の教育を受けた人は、小論文が導入されたあとの世代でも、「時系列的」思考が枠組みを規定しているのでは、と思われることが多いのです。小論文を練習したという効果はあまり見えません。具体的には、研究報告や博士論文において、時系列的に体験しデータを取得したことはよくわかるのですが、それを通じて何を主張しているのかわからないものによくお目にかかります。

そのような文章ですと残念ながら、科学が発祥した西欧的文化圏では「意味不明」「読む価値なし」と捉えられてしまうのです。英語を習得しても、共有された様式で書き、話さないと「論の進め方がおかしい」「質問に答えていない」という誤解や、はては「能力が低い」という評価すら受けかねないのです。

しかし日本文化圏にいるからといって、今や「正しい議論」の方法を学ばないわけにはいかない、ということも強調しておきたいと思います。近頃、グローバル化という話題の中で、日本人には、もっと英語を教育すべきという議論がよく聞かれます。しかしながら、言語というのはコミュニケーションの道具であるだけでなく、考え方にも規定されているものです。いくら流暢に聞こえる英語が話せるようになったとしても、その言語が要求する思考パターンである「議論」の方法が身につけていないと、結局のところ意思疎通できないことはよく経験します。ですから、英語学習と議論の方法の習得は両輪で行われるべきものと、私は経験を通じて考えています。

◆ 複数の型を身につける ◆

ではその英語圏・西洋的文化圏ではどのような教育が行われているのでしょうか。先に紹介した論説の内容に戻ってみると、その発祥の地である古代ギリシア・ローマに由来する方法論の1つは、複数の様式あるいは型をまず身につけ、それらの比較によって違いを意識化し、使い分けをするということです。これはローマの修辞学者クインティリアヌスの約2000年前の著書に記載されています（『弁論家の教育（*Institutio Oratoria*）』紀元95年頃）。自由に表現するためには、かえって、いくつもの様式を習得し、型の訓練をすることが必要という考え方です。

現代ではどのようなになっているのでしょうか。わが国で注目されやすいアメリカを見てみましょう。アメリカでは、いくらアイディアがよくても、それを他人と共有できる「型」に入れ、コミュニケーションできる形にして提示できなければ、その価値は無に等しい、という考え方があります。

私も一例としてアメリカのカリフォルニア州の国語（English-language arts）の2010年から施行されているカリキュラム（<http://www.cde.ca.gov/be/st/ss/documents/finaletlaccsstandards.pdf>、2015/6/22 閲覧）を見てみました。するとまず読解では、幼稚園生（kindergartener）から初等教育の達成目標に、型（text types）の認識ということが挙げられており、例えば物語、詩、小説、現実的な文のどれであるかを選ぶ、ということが書いてあります。また、文のポイントはどこか、関連するいわゆる5W1Hは何か、などを読み取ることが目標として書かれています（そういえば「共感」は書かれていません）。作文（writing）としては、いろいろなことを調べて発表するということがこれも幼稚園から目標に含まれていて、何冊か本を調べて意見を述べる、などという目標があります（私は幼稚園のときだけ親の都合でカリフォルニアにいたのですが、もう40年近く昔のおぼろげな記憶の中に、順番で皆の前に立って意見をプレゼンする機会があって、当時とてもストレスフルだったのを覚えています）。さて、作文ですが小学校4年生になると目標にはっきりと「何かのトピックか文について意見を書き、それを事実とその詳細を理由として支持し、そして最後に表明した意見に関連する内容で結論を書く」という構造が出てきます。これはいわゆるエッセイつまり「主張、その根拠3つ、主張を別の表現で言い直す結論」、の大きく3部（あるいは根拠3つを別々に数えると5部）に分かれる構成の型で、本書で学んでいく「議論」の簡略化された形です。また4年生からは、文献や文学作品などから、自分の分析、思考、研究の内容を支える証拠を見つけてくるという目標も掲げられています。そ



れ以外の「型」としては、「説明文 (informative/explanatory texts)」「物語 (narratives)」などの異なるジャンルの作文も目標とされています。

6年生以上では、目標としてより明確に、「1 議論 (arguments) を書ける。現実的なトピックや文の分析における主張を支えるために、有効な理由づけと関連した十分な証拠を用いて書く」ということが出てきています。ほかの目標は「2 説明文 (informative/explanatory texts) を書ける。複雑な考えや情報を明快かつ正確に伝え分析するために、内容を効果的に選び、構成し、分析して書く」「3 物語 (narratives) を書ける。実際のまたは想像上の経験や出来事を、効果的なテクニック、よく選ばれた事実の、よく構成された出来事の順序で書く」となっています。

ただやはり「共感」は出てきません。「論理」と「共感」どちらもあった方が本来人間存在としてはよいのだと思われますが、そういう意味では、「共感」が強調される日本で「論理」も身につけられたら、世界においてとても力強い存在となるでしょう。

ではアメリカ以外ではどうでしょうか。これまで紹介してきた渡邊氏の論説に戻ると、一例としてフランスにおいては、初等教育では中世以来変わらない文法教育と形式主義的な作文法が学ばれています。一方で、創造性は、小学校で文章が正しく書けるようになり、中学・高校で論理的な構造でものが書けるようになってから、つまり生徒の精神的成熟と技術的完成があつて高等教育で初めて取り組まれる課題と受け止められていると言います。

つまり「成熟の中から個性と創造は生まれるので、子どもにはそれらの発揮は期待しない。それどころか、幼少・学童期に個性や創造力を発揮させるような教育は害を及ぼすと考えられている」というわけです。

読解に関しては、1つの文章内容を機能別に分解し、それぞれの内容を確認してから、論はどのように展開していくか、テーマは何か、どう結論づけられているかと、分解した細部から次第に大きな構造に視点を移す展開で授業や試験問題が構成されていると言います。この、「分析し統合する」、つまり全体を俯瞰しようとするステップは、討論をする際や歴史や科学などほかの科目を学ぶときにも頻繁に使われる、フランスにおいて基本的な学習方法であり、この結果、フランスでは言葉の定義を確認し歴史を振り返り、共通

の概念定義を作り上げてから現在の問題を見る、歴史に学びつつ共通概念を汲み上げ、できるだけ大きな全体像を描こうとする「共同体の文化作り」に力が注がれることになる、とこの論説では述べられています。

結果として同じく西洋的文化に基づくアメリカと比較すると、統合し全体を俯瞰しようという部分が異なります。つまり、古代ギリシア・ローマに源を持つ議論構造が、1 序言、2 叙述、3 論証、4 反駁、5 結論、の5つの要素から成るのに対し、アメリカでのエッセイは、1 主題、2 論証、3 結論、の3要素で構成されますので、背景の叙述と、反対意見への明確な反駁は省かれています。この結果アメリカでは主張に対して直線的かつ簡潔な理由づけを考えるにとどまり、他方この部分をフランスは残していることで俯瞰的な視野を持つとする動機づけが保たれるという結果になると考えられます。ちなみに、古代ギリシア・ローマでの方法論と比較して、感情・道徳性・高潔な人格といった要素への配慮も失われた、とこの論説では加えられています。

◆ 事実に基づく文章の6つの型 ◆

さて、ではアメリカと同じく英語を母国語としてヨーロッパに存在するイギリスではどうでしょうか。イギリスの著名な教育者、スー・パーマーによる8-14歳向けの作文教育の本、*How to Teach Writing across the Curriculum: Ages 8-14*, 2nd ed.(Routledge, 2011) の中に大変わかりやすい「文章の型」の説明を見つけたので、これをもとに少しご説明します（なおこの内容は、TES Global Limited の Resource ホームページからも、この著者の名前または“non-fiction”で検索してダウンロードできます。TESというのは、そのホームページによると英国 *Times* 誌の付録である *Times Educational Supplement* から1914年に独立派生した、教育に携わる人々のための組織・企業体とのことで、近年大学ランキングで有名な *Times Higher Education* もここから1971年に派生したとのこと）。

まず文章の型はフィクションとノンフィクションに分類されます。中でも、他者も認める事実に基づく議論は、当然ノンフィクションに分類されます。ノンフィクションはさらに次の6つの型に分類されています。なお各型の日